

平成30年度 第1回北海道総合開発委員会の概要

1 日時・会場

平成30年8月20日(月) 15:30~17:45 札幌札幌カデッセンパレス 2階「丹頂・白鳥」

2 出席者(委員15名・参与6名) ※五十音順・敬称略

【委員】大賀 京子(北海道教育大学教育学部札幌校准教授)

大森 伊佐緒(木古内町長)

小野寺 俊幸(北海道農業協同組合中央会副会長)

片山 知洋(北海道観光振興機構専務理事)

加藤 知美(特定非営利活動法人北海道NPOサポートセンター理事)

小林 良輔(北海道経済連合会常務理事)

高橋 清(北見工業大学社会環境工学科教授)

武田 純子(北海道認知症グループホーム協会顧問、(有)ライフアート代表取締役)

出村 良平(日本労働組合総連合会北海道連合会会長)

長瀬 清(北海道医師会会長)

中村 恵子(環境カウンセラー、健康・環境デザイン研究所所長)

名和 豊春(北海道大学総長)

三輪 美子(工房 GOLD. WINGS 代表、i m a 国際現代美術家協会理事)

矢島 収(北海道消費者協会専務理事)

山本 強(北海道大学大学院情報科学研究科特任教授)

【参与】安立 真由美((株) シンプルウェイ勤務、函館市観光情報サイト「はこぶら」編集長)

北 裕幸(北海道大学大学院情報科学研究科教授)

北村 貴((株) グロッシー代表取締役)

佐藤 太紀((株) エフエムもえる代表取締役、山高建設工業(株) 代表取締役)

土田 好起(斜里建設工業(株) 代表取締役社長、(株) 知床エゾシカファーム代表取締役専務)

森崎 三記子(釧路モカ女性プロジェクト代表、(株) MOKA. 代表取締役)

3 各委員・参与の主な発言内容

※「(仮称)北海道SDGs推進ビジョン」の考え方や骨子を踏まえ、SDGsを切り口に北海道総合計画の推進を議論

【SDGs全般関連】

- 北海道がSDGsに取り組もうということは、すごいこと。都道府県単位でSDGsをやろうと動いているところは、他であまり聞いたことがなく、先駆的であり、総合計画とうまく関係性を持ちながら進めていけたら素晴らしい。
- SDGsと総合計画をつなげているが、あまりにも細分化や分析をしてしまうと、SDGs全体を見失うような気がしてならない。鳥の目でSDGsを使いながら、総合計画を見ていくということが必要。
- 「誰一人取り残さない」ことがSDGsの肝だと思っており、この言葉を前面に出しながら、北海道としてSDGsに取り組んでいくと、自ずから17のゴールに向かえるのではないかと。
- SDGsのゴールがどういうふうになっているか、今何をしなければいけないのか、この目標がどこまで達成しなければいけないのか、目標値の目的化をするのではなくて、将来像をどうやって皆さんで実現していくのかということが重要なポイント。

【「優先課題Ⅰ あらゆる人々が将来の安全・安心を実感できる社会の形成」関連】

- 健康保持に関して、大きな問題は医師不足と偏在。各大学の医学部の定員が大幅に増加しているが、一人前になるまでには時間がかかり、増加が実感されるまでにはまだ至っていない。
- 医師も一般労働者として、これまでのような働き方ができなくなれば、病院の夜間診療が全くできない。医師には応召義務があり、矛盾をどう解決していくか、早急に決めなければならなくなっている。
- 福祉では、なんと言っても人材不足で困っている。介護の仕事は大変だが、素晴らしい仕事であり、みんなで介護の人材を、きちんと担っていきけるような状況をつくっていただきたい。
- 私の町では病院と老健施設だけで約200人のスタッフが必要だが、地元には医療職や介護職の人材がいない。ベッド数がありながら、そのベッド数を有効に使えていない。
- たばこは、受動喫煙が問題。オリンピックでは受動喫煙防止が必須になっており、受動喫煙防止条例を早期に制定しなければならない。
- 北海道の離職率が高い。一時期、採用抑制をしていたので、最近が入ってすぐに即戦力みたいな感じになる。若い人がそこで中々上手くいかなくて、辞めていくといった現象がある。総労働時間も長い。人手不足なので、労働時間を短くしようとしても現実論としては中々上手くいかない。
- 北海道は、労働局の調査によると、36協定の届け出件数が少ない。届け出る意識がなく残業しているのではないかと推測している。こうした分析を深め解決していかないと、若い人の人づくりや職場の定着が進んでいかない。

【「優先課題Ⅱ 環境・エネルギー先進地「北海道」の実現」関連】

- 国の第5次環境基本計画は、SDGs の考え方を具現化したもので、地域循環共生圏の構築を目指している。その重点戦略を支える環境政策のうち、気候変動対策に係る道の総合計画の指標である温室効果ガス排出量に関する評価が「D」であり、加速度的に取り組むべきと考える。
- 再生可能エネルギーを持続可能な電源としていくため、新エネの量的な拡大ということを図るだけではなく、質的な向上を北海道の中でも進めていくということが必要。
- 安定的に発電できるバイオマス発電の拡大や、情報技術を使い、情報と一緒に考えたシステムとして再生可能エネルギー導入を考えることで、安定的電源として見なしていけるような再生可能エネルギーの質的向上を考えることが必要。
- オリンピックのフードビジョンが設定され、持続可能な食べ方というのは何かということが国から指示されている。これに対して、消費者の教育の項目が是非入ってほしい。

【優先課題Ⅲ 北海道の価値を活かした持続可能な経済成長】関連】

- 北海道産牛肉についても、この先どういった差別化ができるのか見えにくいので、もし、食業界でSDGsを実現しようと思うと、大胆な策がもっと必要。
- 農と食という部分と観光を何かで繋いで、一つのキーワードを作っていただきたい。
- 海外の成長力を取り込んだ経済の持続的発展のためには、引き続き観光分野に力を入れて、インバウンドの更なる加速化、それに伴う経済波及効果の増大が必要。そのためには、日本版DMOの形成や、滞在型・広域周遊型で、かつ、季節による偏りのない観光商品の開発が重要。
- 観光振興、それと環境・自然との共生、こういったものが今後の大きな課題・テーマということになっていくのではないかな。
- アドベンチャーツーリズムの振興など観光を進めるにあたって、鳥を観察できる季節や近隣の景観などのデータベース化や、ルールづくりだとか、そういったところまで踏み込むべき。
- 文化についての興味は、今後、アイヌとか縄文が、海外からの観光客にさらに注目されて来るのではないかな。それを情報提供して、来道につなげるには、展示型の観光ではなく、体験型の観光を準備するというのが非常に重要であり、さらに、言語の通訳をしながら、観光メニューも理解し、案内が出来る人材の育成が必要。
- 昔は地元には産業、企業があり、働く所があったので、戻ってきて仕事できたが、今は産業が縮小して、戻ってくる人がいなくなっている。そのため地元から人が出ていく一方で、東京に行ってしまう。抜本的な対策を考えなければ、人づくりも地域づくりも非常に難しい。

【優先課題Ⅳ 未来を担う人づくり】関連】

- 社会に出た時にいろんな尺度、物差しがあるということ、教育の中により一層反映していただきたい。
- 北海道のすごさ、それを魅力に感じる感受性の高い人づくりや、人口減少していく北海道での働き甲斐をどう見だしていくかが大切。その一つの軸として、地域まで根付いた教育、人づくりが大切。

【優先課題Ⅴ 持続可能で個性あふれる地域づくり】関連】

- 人材が私の町から函館に出ていくが、函館から札幌経由で東京に行くのが今の日本の流れになっている。こういう大きなところから変えていかなければならないので、国を巻き込んだ議論が必要。
- 地方に行って頑張る、期待が持てるというマインドづくりを、かなり広く展開していかなければならない。地方に戻りたいから戻る、行きたい人が行ける環境と、行きたくなる雰囲気づくりが必要。
- 縄文遺跡の世界遺産への登録に向け重点的に取り組んでいただきたい。
- 教育の場や社会教育の場で、アイヌなど北海道の文化をもう一度再発見していくような取組も必要だと思う。
- 専門家による指導が受けられない一般的なレベルにある若い女性アスリートの栄養障害などの問題に対し、早く手を打ち、改善を図らなければならない。